

2007年11月16日

ドイツ語圏における子ども大学の概況

1. 子ども大学の歴史

2002年：

ドイツのチュービンゲンで地元紙 *Tuebinger Blatt* の協力を得て最初の子ども大学 (Children's University) が開設された。大学教授とジャーナリストが共同して、7~12歳の子どものため無料で授業を行った。1回目の授業に400人の子どもが参加し、2回目の授業では900人の子どもが参加した。

2003年：

ドイツのフェーマン島で最初の子ども大学が、チュービンゲン子ども大学の形式に従って、開校された。講義のテーマは、「なぜ火山は火を噴くのか」であった。

2期目のチュービンゲン子ども大学では、「なぜクローン人間を造ってはいけないのか」というテーマで開催され、1000人の子どもが参加した。ドイツ中のメディアが2期目のチュービンゲン子ども大学について活発な報道を行った。

ドイツ語圏 (ドイツ、オーストリア、スイス) の都市で子ども大学が次々と誕生した。ウィーンでも、この都市に所在する全大学が参加して子ども大学がスタートした。3400人の子どもが参加し、最終日に1000人以上の子どもが修了証書を受領した。同年の講義科目は20科目であったが、後に (2005年) に300科目に増えた。

2004年：

ベルリン大学でフォルカー・ゲアハルト教授が、「なぜわれわれは何でも知ろうとするのか」というテーマで講義を行った。

ノルトライン・ヴェストファーレン州は、州全体で子ども大学に取り組むことを決定した。

スイスのバーゼル市で子ども大学が初めて創設された。

チューリッヒ子ども大学はチューリッヒ婦人同盟から社会文化賞を受賞した。

ミュンヘンでは子ども大学事務局が設立され、ミュンヘン中の大学が子ども大学へ参加した。学期ごとに開講大学を交代して大勢の子どもが受講できる体制ができた。一番バッターは当地最大のミュンヘン大学 (ルードヴィッヒ・マクシミリアン大学) で、大勢の子どもが受講し大成功を収めた。

2005年：

チュービンゲン子ども大学は、その実績を評価されて EU からデカルト賞を受賞した。

2. 子ども大学の現状

子ども大学は現在ブームの様相を呈しており、各方面の多数の関係者（親、教師、一般大衆）を巻き込んで活発な議論が展開されている。現在までのところ、ドイツ語圏に70以上の子ども大学や子どもカレッジがあり、イタリア、イギリス、コロンビア、グランカナリア等に波及している。子ども大学へ参加している多くの大学、工科大学、専門学校は、子ども大学は広告宣伝の点で理想的な手段であると考えている。関係大学は、自校の学部や研究所をマスコミを通して多くの大衆へ効率的に紹介する機会を与えられている。また、それと同時に、大学の教職員は自分の子どもを自分たちの職場へ案内する機会ができ、職場のコミュニケーションの好転に寄与するという効果も実感している。

3. 子ども大学のねらい

子ども大学のキー概念は、子どもの好奇心と科学者の好奇心を結びつけることである。子ども大学の提唱者でプロジェクトマネジャーであるカロライン・アイバー氏によると「子ども大学で学んだ子どもは、新しい疑問やアイデアや問題解決手法を家へ持って帰るため、かれらの精神生活は豊かになる。同時にまた、教授は自分の研究をわかりやすい言葉で説明する努力をすることにより、自分の世界を豊かにすることができる。また、子どもが理解しやすいように様々なアプローチをとることにより、非常に複雑なテーマも楽しい雰囲気の中で教える経験を得るようになる。

参加大学の中には、能力の高い子どもを囲い込もうと試みる大学がある一方、すべての子どもを同じ条件で受け入れようとするばかりでなく、教育環境の整わない社会階層の子どもたちを学習プログラムへ誘導しようとしている大学もある。

4. 授業の内容

講義のテーマとしては、一般になぜ (why) を論じるテーマを重視し、いかに (how) を論じるテーマより優先されている。たとえば、「エンジンはいかに動くか」より「なぜ自動車は動くか」をテーマとして優先している。なぜを論じる場合目的がはっきりしているが、いかにを論じるといくつもの付随的な質問がからんでくるからである。

多くの大学は子どもたちをより長期的に大学へ引きとめるため、参加型・創発型の記述式またはワークショップ式授業を引き続き追加プログラムとして準備している。他の大学は、聴講式の講義や、参加型のワークショップやセミナーを、ブロック方式で次々と提供している。

チュービンゲン子ども大学は、「こども大学」というタイトルで3冊の講義録と講義録CDカセットを出版している。他の二つの大学は、子どもたちの助けを借りて定期的に機関誌を発行し、かつ子どもと専門家間の質疑応答を単行本で発行している。ほとんどすべての大学は子ども大学のカリキュラムや子どもたちの感想などをインターネットウェブサイ

トで公表している。

同子ども大学が 2007 年夏学期に行った講義のテーマは次のとおりであった。

- ・なぜわれわれは法律を必要とするのか？
- ・なぜ黒い森（シュバルツバルト）に銀が出るのか？
- ・なぜわれわれは本を読まなければならないのか？
- ・なぜ腹がすくとお腹がぐうぐう鳴るのか？
- ・なぜ薬は病気に効くのか？
- ・なぜ動物たちは恋をするのか？

5. 授業の運営

授業は、質疑応答及び出席証明の時間も入れて、30分から45分以内に実施されている。授業を適切に行うためには、運営に当たる協力者・アシスタントが必要である。授業の補助機器の管理も重要で、マイクが聞こえ難いと子どもたちはすぐ興味をなくす。

ほとんどの子ども大学に共通する点は、授業料は無料で、参加登録、学生証の配布、履修後の履修証明書の授与を行っている点である。大人は授業には参加できない。理由は簡単で、大人が家で子どもたちに何を学んだかテストしたがるのを排除するためである。

6. 授業の教授法

授業に当たって下記の点を注意することとなっている。

- a) あまり質疑応答を多くしない。これが多すぎると授業の流れが阻害されるからである。
- b) AV機器の使用はあくまでも補助的にとどめること。
- c) よい授業は、わかりやすく、あまりいろいろなことを詰め込まず、話し言葉で話すことである。子どもたちの日常生活に関連した事柄は興味を引く。たとえ話も子どもたちに好評。数字は理解しやすいよう具体的に説明する。たとえば、地底40キロメートルという場合、どこからどこまでの距離と同じとか、1/500という場合、このホールの中で一人だけ、というように子どもたちが理解しやすいように身近な事例や現象を利用して例え話をするとよい。
- d) 緊張を保持することが必要。ときどき教えたことのまとめとして質疑応答を行なうとよい。最後に全体の課題に対する回答をキーワードで簡潔に説明する。あるいは、直接回答を与えないで、さらに次々疑問を感じさせ考えさせるような意味深長なやり方もある。
- e) 子どもは専門用語を学ぶことを好むので、よく吟味した用語をタイミングよく話すことよい。子どもらはその専門用語を賞品のように大事に家へ持って帰り、親に得意げに説明する。一つか二つ難しい言葉をかみ砕いて教えてあげると喜ばれる。

7. ミュンヘン子ども大学

1) 成立の経緯

子ども大学事務局が設立され、ミュンヘン中の大学が子ども大学へ参加した。子ども大学は従前あったような夏休みの事業ではなく、一般の大学と同じように年間を通じて前期と後期に開催、隔週の金曜日に授業を行う。子どもの参加費は無料。市内の5つの大学と数ヶ所の専門学校が協力、学期ごとに開講大学を交代して大勢の子どもが受講できる体制をつくった。また、一人の教授がずっと事業をするのではなく、毎回違う教授が担当するようになっている。ミュンヘンで最初に子ども大学を開講したのは当地最大のミュンヘン大学（ルードヴィッヒ・マクシミリアン大学）で、大勢の子どもが受講し大成功を収めた。

事務局は各大学との連絡・交渉、宣伝、授業運営、各種支援の面で活動し、大学側は教員やテーマを決めるという役割分担がなされた。平均して、一つの授業に約600人の子どもが参加し、12人のアシスタントが授業の支援に当たった。

このミュンヘン子ども大学事業の中核は、ミュンヘン子ども大学推進グループ（構成メンバー：ドイツ才能教育協会、欧州学校、二人のジャーナリスト、文化&遊び空間協会関係者）で、新聞社、ラジオ局、TV局等とのマスコミが強力にバックアップを行った。しかし、ミュンヘン市からの財政的支援はなく、代わりにミュンヘン貯蓄銀行（青少年基金）などが財政的に支援を行った。このミュンヘン貯蓄銀行は、「ミュンヘン市の子ども・青少年」ジャーナルを発行しているが、子どもの受講制度の実施や学期資料の作成費用に対する財政支援を行って3年目に入っている。その他にもミュンヘン子ども信託組合も前年から財政援助を始めた。

2) 子ども大学の現状

子ども大学はしっかりと地域に根を下ろし、地位を確立した。各セメスターには4000人もの子どもが講義を聴いている。いろいろな苦情が事務局へ寄せられるが、事務局はいまではそのような苦情を気にしない。苦情というのは、たとえば、教授は学習に熱心な聴衆に向けてだけ講義をしているとか、講義は子どもたちに難しすぎて退屈であるとか、教授が子どもたちにおとなしく座って自分の話をよく聞けと強制する、などである。

教授たちにとって、自身の研究を子どもたちに解りやすく教えることはとても難しいが研究の上でも意義が大きいし、子どもと触れ合い、「子どもも大人と同じ人間」だと理解できることも良い点であるといわれている。現実には、子どもへの授業をとっても上手に行う教授もいれば、へたくそな教授もいるのだが。

なお、子ども大学で授業を行う教授への報酬はゼロ。大学は教室を無料で貸している。市内の新聞社などのマスコミは、参加する子どもの募集広告を無料で出すなどの形で協賛している。

3) 授業のテーマ

ミュンヘン子ども大学で取り上げられたテーマは次の通りである。

- ・なぜ人間は病気になり死ぬのか？
- ・ばか、このやろう！ なぜ人間は争うのか？
- ・この近くの湖に何がすんでいるのか？
- ・高層ビルはなぜますます高くなるのか？
- ・なぜ人間は聞きたいことだけを聞く傾向があるのか？
- ・なぜわれわれはやりたいことをやってはいけないのか？
- ・なぜ顔に鳥肌が立たないのか？
- ・ビット、バイト、0-1-0、コンピュータは考えることができるか？
- ・ユーロ、ドル、円、なぜ人間はお金を必要とするのか？
- ・私も出来る、芸術とは何か？
- ・旅行の目的地—なぜ休日で人が遊びに行くところで働いている人がいるのか？
- ・エネルギーはどこから来るのか？
- ・太陽光でいかに自動車を走らせるか？

4) 入学手続きと授業の運営

子ども大学の参加手続きは簡単で、受講希望の子どもは1学期分の授業履修の申し込みを電話かEメールで行い、授業が始まる直前に受講カードを受け取り、教室へ行って受講する。

すべての授業は効率的に運営されている。教授たちは授業をすぐ始めることができ、子どもたちが興味をなくし始めたらすぐフィードバックがある。講義の後、質疑応答があり、子ども報道班が講義の内容をミュンヒナー・メルクール紙や子どもインターネット・ポータル www.pomki.de 向けに報告する。

親たちは授業の間カフェテリアで時間を過ごしたり、係員の案内で大学の建物を見学する。

5) 教育制度と子ども大学

ミュンヘン子ども大学は、子ども・青少年教育体系の一つとして位置づけられている。子ども大学関係者は、他の子ども教育関係の制度を代替するとか、子ども大学が現行の学校制度よりよいのだということを主張しているわけではない。子ども大学は現在の全教育ネットワークの中で新しく現れた一つのリンクにすぎない。大学は扉を外へ開いた。それによって今まで外部からしか見ることができなかった歴史的かつ荘厳な教育“寺院”である大学の内部がどうなっているのかを、子どもたちは見ることができるのである。

多くの大学や研究所は子どもたちのために継続的かつ長期的教育事業を提供することが

子どもたちばかりでなく、大学生たちや大学関係者にとっても価値があるということを読んだ。この好例が、子どもたちのためのホリデー・ワークショップを行っているミュンヘン大学（ルートヴィッヒ・マクスミリアン大学）の物理倫理学部の EXPEKO 研究所や少女たちのための秋大学で様々な実験や講義を行っているミュンヘン工科大学の取組みである。このように多数の“生徒実験室”は、継続的に教室や機器や専門的知識を子どもたちや青少年に提供している。

6) 今後の展望

子ども大学の制度は、過渡的な制度ということができる。数年後には、教室や講座は決まった場所に設営され、子どもたちは、通常大人が利用できるように、自由にすべての設備を使うことができるようになるだろう。現在までのところ、ミュンヘン子ども大学は学校の授業時間外に開かれている。すなわち、金曜日の放課後または祭日で休校日いずれかの時間帯である。ミュンヘン子ども大学推進協議会や青少年文化教育関係協会などにおける今後の課題は、これらの多様な試みを巧みに調整し、当市のすべての子どもたちに教育の機会を与えることであろう。

ミュンヘン子ども大学の次の課題は、小学校教育学部および教育手法研究所と共同で、すべての形態とグループに対する教育理論を開発することである。

翻訳及び編集責任者

酒井キャリア教育研究所

所長 酒井一郎

出典：

1. Margit Maschek-Gruenesl, Lectures for Children – Children’s University, Kultur & Spielraum Muenchen, April, 2007
2. Die Kinder-Uni (Kinder-Uni-Geschichte, Verzeichnis, Studienberatung, Bibliothek), <http://www.die-kinder-uni.de/html/tubingen.html>

参考資料

(次頁以降を参照のこと)

添付参考資料

子ども大学教科書 (CD カセット)
(Die Kinder-Uni-Hoerbuecher)

この教科書では次のような講義のテーマが紹介されている。

①最上段の教科書

なぜディノザウルスは死滅したのか？ / なぜ火山は火を噴くのか？

②2段目の教科書

なぜ学校はつまらないの？ / 人間はなぜ冗談を言うと笑うのか？

③3段目の教科書

なぜ人間は死ぬのか？ / なぜ人間は猿の子孫なのか？

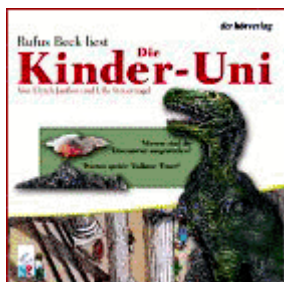
④4段目の教科書

なぜ金持と貧乏人がいるのか？ / なぜイスラム教徒は絨毯の上で祈るのか？

Die Kinder-Uni-Bibliothek

Die Kinder-Uni-Hörbücher

Die Kinder-Uni. Das erste Semester wurde in vier CDs vertont. Sprecher ist Rufus Beck.



Ulrich Janßen und Ulla Steuernagel
Die Kinder Uni. Forscher erklären die Rätsel der Welt.
Warum sind Dinosaurier ausgestorben? / Warum
speien Vulkane Feuer?

Sprecher: Rufus Beck, Nora Hickler, Guy Luchting
1 CD / 1 MC

Laufzeit: ca. 70 Minuten, 14,95 Euro



Ulrich Janßen und Ulla Steuernagel
Die Kinder Uni. Forscher erklären die Rätsel der Welt.
Warum ist die Schule doof? / Warum lachen wir über
Witze?

Sprecher: Rufus Beck, Nora Hickler, Guy Luchting
1 CD / 1 MC

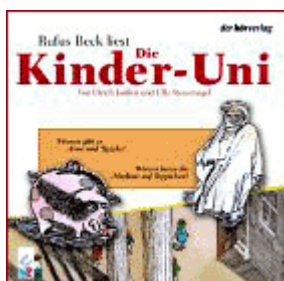
Laufzeit: ca. 60 Minuten, 14,95 Euro



Ulrich Janßen und Ulla Steuernagel
Die Kinder Uni. Forscher erklären die Rätsel der Welt.
Warum müssen Menschen sterben? / Warum stammt
der Mensch vom Affen ab?

Sprecher: Rufus Beck, Nora Hickler, Guy Luchting
1 CD / 1 MC

Laufzeit: ca. 55 Minuten, 14,95 Euro



Ulrich Janßen und Ulla Steuernagel
Die Kinder Uni. Forscher erklären die Rätsel der Welt.
Warum gibt es Arme und Reiche? / Warum beten
Muslime auf Teppichen?

Sprecher: Rufus Beck, Nora Hickler, Guy Luchting
1 CD / 1 MC

Laufzeit: ca. 73 Minuten, 14,95 Euro

